

攻撃対応行動の実行を規定する要因に関する研究

筑波大学大学院(博)心理学研究科 尹 熙奉

筑波大学心理学系 高野 清純

A study of determinant factors in the execution of counter-aggressive behavior

Heebong Yoon and Seijun Takano (*Institute of psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305, Japan*)

The purpose of this study is to examine the determinant factors in the execution of counter-aggressive behavior. The subjects were 36 elementary school children (16 boys and 20 girls). Major findings are as follows: (1) Outcome expectancy and outcome value have influence the execution of counter-aggressive behavior. Moreover, the execution of counter-aggressive behavior was more closely connected with internal expectancy than to external expectancy. (2) In the aggressive characteristics of children, aggressive children than non-aggressive children were more affected by the importance of counter-aggressive behavior, and tried to execute counter-aggressive behavior.

Key words: counter-aggressive behavior, outcome expectancy, outcome value, schoolage children.

挑発状況において被害を受けた被害者が実際に攻撃対応行動を行う場合に、様々な社会的認知変数の媒介要因が考えられる。認知的社会学習理論によれば、攻撃者は、攻撃が価値ある報償を産出するだろうと信じるため、また攻撃的行為の有害な結果を認知的に最小化するために、攻撃に好意を示す(Bandura, 1973)。ということは、攻撃対応行動を行う場合にも、その結果についての予期、その結果の価値についての判断の要因が重要であると思われる。また、尹(1991)の研究では、攻撃的児童が攻撃対応行動を最初の攻撃行動よりは悪くないと評価したと指摘している。このような結果から、攻撃的児童が非攻撃的児童より攻撃対応行動を当然頻繁に実行するだろうと思われる。しかし、これまでの児童の攻撃行動を理解するための研究としては、被験者を攻撃的児童と非攻撃的児童に分類して行われた研究(Boldizar, Perry, & Perry, 1989; Cairns & Cairns, 1984; Perry, Kusel, & Perry, 1988; Sancilio, Plumert, & Hartup, 1989)があり、そこでは、攻撃的児童の分類方法として、仲間指名法と教師評定法が使用されている。しかし、学校生活の場面で生じる攻撃行

動に対して、児童と教師では、それぞれ異なって知覚する場合がある(Humphrey, 1982; Lancelotte & Va-ughn, 1989)という結果も得られている。したがって、本研究においては、長期間にわたって児童を直接に観察し、攻撃的児童と非攻撃的児童とに分類する。

そこで、本研究の目的は、第1に、結果についての予期、結果の価値についての判断という要因が攻撃対応行動の実行にどのように影響するのかを検討する。第2に、観察された児童の攻撃行動と攻撃対応行動の実行との関連について検討する。

方法

被験者 尹・広田(1993)と同一の長野県内の公立小学校6年生36名(男子16名, 女子20名)。

手続き 尹・広田(1993)の研究で行われた観察の結果に基づいて被験者を攻撃的児童, 非攻撃的児童とに分類し, その同一対象者に本研究の調査を実施した。実施においては, 研究内容を周知していた担任教師が刺激文の内容と各項目の評定方法を説明し,

児童に各項目を評定させる形態で行われた。

刺激文は挑発場面において攻撃対応行動を喚起させる架空のエピソードの形で4種類が作成された。刺激文の内容には、挑発者の意図(敵対的意図と友好的意図)、挑発の結果(被害の大小)が組み合わせられた。次に示したのは、刺激文の一つ(敵対的意図で被害が大きい)の例である。

あなたが他の友だちと遊んでいるときに、Aくん(さん)がわざと投げたボールがあなたの顔にあたって、鼻血が出てしまいました。あなたは、仕返ししてやろうと思いました。

各刺激文には、被験者が仕返しを実行するかどうかを問う1項目、その答えに関する理由を問う3項目、仕返し自体の「意味」、「大切さ」、「必要性」を問う3項目の合計7項目が提示された。

結果と考察

各条件ごとの頻度を表1に示した。この表から見るように、意図が敵対的で被害の結果が大きければ仕返しを実行すると答えた被験者が86%である。被害が小さくても意図が敵対的であれば36%の被験者が仕返しを実行すると答えた。反面、意図が友好的であれば被害の大小に関係なく80%以上の被験者は仕返しはしないと答えた。それに関連して、敵対的

Table 1 各条件ごとの頻度

仕返し	AL	AS	PL	PS
する	6(16.7)	1(2.8)		
(場合)	25(69.4)	12(33.3)	4(11.1)	8(22.2)
しない	5(13.9)	23(63.9)	32(88.9)	28(79.8)
重要性	AL	AS	PL	PS
1	2(5.6)			
2	19(52.8)	10(27.8)	4(11.1)	6(16.7)
3	14(38.9)	19(52.8)	13(36.1)	13(36.1)
4	1(2.8)	7(19.4)	19(52.8)	17(47.2)
χ^2 値	20.56**	8.16*	8.74*	12.26**

* $p < .05$ ** $p < .01$

1)内の数字は%, (場合)は場合によってすることを示す。

2)各条件の名称及び重要性の強度は以下の通りである。

AL-敵対的意図で被害が大きい

AS-敵対的意図で被害は小さい

PL-友好的意図で被害が大きい

PS-友好的意図で被害が小さい

1(非常に重要である)から4(全く重要ではない)まで。

意図で被害が大きい場合に58%の被験者が、被害が小さい場合でも28%の被験者が仕返しの重要性を認識して仕返しをしようとしていた。しかし、意図が友好的な場合には被害の大小に関係なく83%以上の被験者が仕返しの重要性に意味を与えなかった。このような結果から、児童が挑発状況の中で攻撃対応行動を行う時には被害の大きさよりも挑発者の意図に左右して実行するだろうということが分かる。また、攻撃対応行動の実行にあたってはその結果の重要性を十分認識している。すなわち、攻撃対応行動自体を重要であると認識する場合には実行の方向に向いて、仕返しをするだろうが、重要ではないと認識する場合には仕返しをしない。このことは、仕返しの実行とその結果の重要性の分布を、二次元のクロス集計した分析結果にも明らかになっている(表1の下段)。

その攻撃対応行動の実行に影響する結果予期の項目別の頻度が表2に示されている。まず、仕返しをすると答えた被験者のその理由は、①仕返しするべきだから(2)、②腹が立つから(5)、③友だちからバカにされるから(0)、④人気者になれるから(0)であった。つぎに、場合によってすると答えた人は、①自分のきげんが悪いときにはする(6)、②がまんできないときにはする(31)、③逆に仕返しされる心配がないときにはする(5)、④後の友だち関係が悪くならないときにはする(7)の結果であった。この結果からみると、仕返しの実行においてはその結果の外的よりは内面的な予期に重点がおかれているといえよう。反面、仕返しをしないと答えた人は、①仕返しするべきではないから(55)、②やったら自分の気持ちが悪くなるから(24)、③友だちからさら

Table 2 仕返しの実行の結果に関連する要因

仕返し	結果予期	頻度
する	仕返しするべきだから	2
	腹が立つから	5
	友だちからバカにされるから	0
	人気者になれるから	0
場合	自分のきげんが悪いときにはする	6
	がまんできないときにはする	31
	逆に仕返しされる心配がないときにはする	5
	後の友だち関係が悪くならないときにはする	7
しない	仕返しするべきではないから	55
	やったら自分の気持ちが悪くなるから	24
	友だちからさらされるから	10
	先生から怒られるから	0

Table 3 各条件別の平均値と標準偏差

		非攻撃的児童群	攻撃的児童群	t
仕返し	AL	1.95(0.61)	2.00(0.52)	1.37
	AS	2.65(0.49)	2.56(0.63)	1.65
	PL	2.95(0.24)	2.81(0.40)	3.25*
	PS	2.80(0.41)	2.75(0.45)	1.19
重要性	AL	2.41(0.63)	2.33(0.45)	1.95
	AS	2.91(0.59)	2.79(0.75)	1.64
	PL	3.44(0.57)	3.24(0.85)	2.26*
	PS	3.50(0.61)	3.01(0.85)	1.98*

*p<.1 **p<.05

われるから(10), ④先生から怒られるから(0)の結果であった。この結果は、仕返しを実行しない場合にも仕返しを実行する場合と同じようにその結果の外面的よりは内面的な予期に重点をおいていることがわかる。すなわち、行う攻撃対応行動が周りの人間関係よりも自分自身の価値観に基づいて攻撃対応行動の実行を行う。

次に、仕返しを実行するかどうかを児童の攻撃的特性に関連して分析した結果が表3に示されている。意図が友好的で被害が大きかった場合の仕返しの実行を除き、統計的に有意差はなかった。しかし、次のようなことはいえよう。意図が敵対的で被害が大きかった場合は、児童の攻撃的特性に関係なく攻撃対応行動の重要性を認識し、攻撃対応行動を実行する傾向がある。そして、意図が意図が敵対的で被害が小さかった場合、意図が友好的で被害が大きかった場合や意図が友好的で被害が小さかった場合には、攻撃対応行動に重要性を与えなかった結果、攻撃対応行動を実行しない傾向がある。また、非攻撃的児童よりは攻撃的児童が、攻撃対応行動の重要性を強く感じ、攻撃対応行動を実行しようとする傾向があった。

このような結果からみると、児童の仲間関係の中で日常的に行われている攻撃行動に対する仕返しとしての攻撃対応行動の実行にはその結果についての予期、その結果の価値についての判断が影響することは確かであると考えられる。また、児童の攻撃的特性によっても攻撃対応行動の実行に差があらうと思われる。しかし、探索的に行われた本研究の結果だけではその事実が言い切れない。それで、攻撃対応行動の結果についての予期、その結果の価値についての判断を攻撃対応行動の実行を規定する主要規定要因としてとらえ、攻撃対応行動の実行との関連性を詳細に検討していく研究が必要であろう。

要約

本研究は、結果についての予期、結果の価値についての判断という要因が攻撃対応行動の実行にどのように影響するのか、観察された児童の攻撃行動と攻撃対応行動の実行との関連について検討するために行われた。攻撃対応行動の予期やその重要性によって攻撃対応行動の実行が影響された。実行の時、攻撃対応行動の予期は外面的よりも内面的な予期が重要視された。また、攻撃対応行動が重要であると攻撃対応行動を実行し、そうではないと実行しなかった。

児童の攻撃的特性においては、非攻撃的児童よりは攻撃的児童が、攻撃対応行動の重要性を強く感じ、攻撃対応行動を実行しようとする傾向があった。

引用文献

Boldizar, J.P., Perry, D.G., & Perry, L.C. 1989 Outcome values and aggression. *Child Development*, **60**, 571-579.

Bandura, A. 1973 *Aggression: A social learning analysis*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.

Cairns, R.B., & Cairns, B.D. 1984 Predicting aggressive patterns in girls and boys: A developmental study. *Aggressive Behavior*, **10**, 227-242.

Humphrey, L.L. 1982 Children's and teachers' perspective on children's self-control: The development of two rating scales. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **50**, 624-633.

Lancelotta, G.X., & Vaughn, S. 1989 Relation between types of aggression and sociometric status: Peer and teacher perceptions. *Journal of Educational Psychology*, **81**, 86-90.

Perry, D.G., Kusel, S.J., & Perry, L.C. 1988 Victims of peer aggression. *Developmental Psychology*, **24**, 807-814.

Sancilio, M.F., Plumert, J.M., & Hartup, W.W. 1989 Friendship and aggressiveness as determinants of conflict outcomes in middle childhood. *Developmental Psychology*, **25**, 812-819.

尹 熙奉 1991 児童における挑発状況、攻撃行動、及び攻撃対応行動のついでの評価。筑波大学修士論文

尹 熙奉・広田信一 1993 教室における児童の攻撃行動の観察的研究。未公開